

置かれるようになっていた。

一方、温湿度をはじめとする設備の管理や収蔵庫以外の館内清掃については、委託業者のスタッフが、日々細かなところまで気を配りながら業務にあたってくれていたおかげもあり、大きなトラブルが発生することもなかった。つまり、学芸員よりもむしろ彼らようなスタッフの方が、無意識のうち、あるいは彼ら自身の業務としては当たり前のこととしてIPMに取り組んでいたともいえる。

しかし、開館30周年を迎えたころから設備面では空調設備の老朽化の問題などが表面化するようになってきた。例えば、近年の夏の猛暑に空調が追いつかなくなり、温湿度、特に湿度の調整が非常に難しくなっていた。また、2009年にミュージアムカフェを新設したことで、害虫が館内へ侵入してくるのではないかと、あるいはこれまで予期しなかったようなトラブルが発生するのではないかとという危機感が学芸員の中にも芽生えるようになった。こうしたことがきっかけとなり、これまで実行に移せなかった収蔵庫内の清掃をはじめ、未整理資料の整理に着手したり、IPM研修会などに参加するようになっていった。しかし、IPMの研修会に参加すればするほど、本格的にIPMに取り組むことの難しさにも行き当たる結果となってしまっていた。そのような時期に持ち上がったのが、博物館の移転・リニューアル計画であった。

新しい博物館におけるIPMへの取り組み

建築設計への参画

墨田区の新しい博物館は、地上5階建て既存倉庫の半分を博物館に改修したもので、建物の半分は現在も倉庫として継続利用されている。この計画が持ち上がった時には、「倉庫を改修して博物館ができるのか」と疑問に思ったが、もともとが倉庫であるため、躯体そのものが頑丈である上、各階の天井も高く、床の耐荷重も大きいという好条件を備えていることがわかった。

今回のリニューアルの主たる目的は、収蔵スペース不足の解消、展示スペースの拡張をはじめ、これまでの博物館活動のなかで蓄積されてき

た諸問題を解決し、さらには旧館では実現が難しかった機能・設備の導入にあった。そのため、建築の基本設計の段階から学芸員との打合せの機会が設けられ、何が問題なのか、あるいはどのような機能・設備があれば良いのかなど、学芸員の意見を聞き、可能な限りその意見を汲み入れるよう検討されたのは、大変に恵まれていた。打合せでは、学芸員からIPMを意識した意見も多く出されたが、初期のころには設計者をはじめ博物館以外の関係者にはなかなか理解してもらうことができず、IPMについての説明を一からする必要があった。IPM研修会などに参加して得たにわか知識を総動員させて説明を重ねていくうちに、関係者にもIPMに対する理解が深まり、後には設計者側からもIPMを意識した発言がなされるようにまでなった。

収蔵庫エリアについての検討

このように設計段階から学芸員が関わることができたおかげで、新博物館において本格的にIPMに取り組むための環境づくりはかなり高いレベルで進められていった。特に入念な検討を繰り返してできたのが、新しい収蔵庫エリアである。

ところで、当館では収蔵資料を大きく下記のように分類して管理している。(数字は当館の分類番号)

- 1 浮世絵をはじめとする絵画類
- 2 たばこ盆
- 3 きせる
- 4 たばこ入れ
- 5 1～4以外の日本の喫煙具
- 6 外国の喫煙具
- 7 たばこ包か(パッケージ類)
- 8 たばこ製造・販売・宣伝用具
- 9 看板・ポスター
- 10 古文書・古文獻
- 11 その他の資料
- 12 塩関係資料
- 13 たばこPOP資料
- 14 旧世界のたばこ工芸館資料

このように材質も性格も非常にバラエティー

り、異常が生じた際にも少しでも早く対処できるようになった。

②虫トラップの設置

虫トラップについても、開館直後から設置を開始し、月に1度、全てのトラップを回収・観察して、状況確認を実施している。

③その他（ルールづくりなど）

旧館では台車や脚立をはじめ、さまざまな道具、物品を、特に収蔵庫用とそれ以外用に区別することなく使用してしまっていたが、新たに収蔵庫内と収蔵庫外で使用するものを厳格に区別し、併用しないようにするためのルールづくりなども開始した。

資料移転

新たにIPMへの取り組みを開始したのと並行して実施したのが、移転・リニューアル計画の大きな目的の一つ、資料移転作業である。4月の開館後、新しい博物館の運営が軌道に乗ってきた6月ごろから、少しずつ資料整理を始め、新しい収

蔵庫の環境が落ち着いてきた11月より本格的な移転作業を開始した。

資料移転は、大きく下記のような段階を経て実施した。

第1フェーズ：たばこ収蔵庫1に入れる資料の移転
（浮世絵・屏風・軸物などの絵画類、古文書・古文献、たばこ盆、たばこ入れなど）

↓

第2フェーズ：塩収蔵庫に入れる資料の移転
（塩の実物資料）

↓

第3フェーズ：たばこ収蔵庫2に入れる資料の移転
（残りの全ての資料+什器）

今回の資料移転作業にあたっては、「全ての資料を1点1点状態確認しながらクリーニングをする」ということを大前提とした。IPMを意識しただけでなく、旧収蔵庫の中での汚れを新収蔵庫には持ち込みたくないと考えたからである。



たばこパッケージ什器



引き出しの中のパッケージを一つ一つクリーニング



引き出しも一つ一つクリーニング



外だけでなく、内部も全てクリーニング



資料移転が完了した旧収蔵庫

第1, 第2フェーズについては、たばこ収蔵庫1も塩収蔵庫も、庫内の什器は全て新規であったので、資料クリーニングのみの作業であり、たばこ盆など扱いに注意が必要な資料や、岩塩など重量がある資料などもあったものの、全体的な作業としては、さほど時間もかからず順調に進められた。しかし、第3フェーズについては、資料数がそれまでに比して膨大であったことに加え、什器の移転も含まれていたことから、より煩雑で、多くの時間と労力を必要とする作業となった。

資料クリーニングについては、文化財クリーニング用の布(ウェット/ドライ)の使用を基本とした。パイプやライター、灰皿などの資料は、進行状況が分かり易いので、数は多くても比較的スムーズに作業が進められた。しかし、ポスターやパッケージ、マッチラベルのような紙資料については、数が膨大であるだけでなく、進捗状況が分かりづらいことから終わりが見えず、クリーニングをやめてしまいたい衝動に駆られることが何度もあったが、クリーニングをするとその汚れ具合がわかるのでやめるわけにもいかず、気の遠くなるような作業が続くことになった。

什器クリーニングについては、水拭きで汚れを落とした後、エタノールで再度クリーニングすることを基本的な流れとした。引き出し什器の場合は、引き出しだけではなく、引き出しを抜き出した周りの内外も入念にクリーニングした。

このような手順で作業をおこなったことから、3ヶ月ほどで終了する予定であった移転作業は最終的には4ヶ月半かかって終了となった。

なお、清掃もなかなか行えず、資料が溢れか



資料が搬入された新収蔵庫

えていた旧収蔵庫の状態から、什器搬出後の壁や床からはカビや虫などが発見されるのではないかと予測されたが、恐れていたカビなどが見つかることはなく、収蔵庫の環境としては良好であったことが再確認できた。一方、2013年の閉館以降、収蔵庫以外の空調は停止し、また清掃も行わなくなっていたため、展示室などではシバンムシなどの害虫発生が確認され、また建物の壁面などにもカビの発生が認められるなど、改めて空調管理や清掃の重要性も再認識されることとなった。

おわりにかえて

以上のように、当館のIPMへの取り組みは、ようやくそのスタート地点に立ったところである。新館開館後に導入した環境モニタリングシステムについては、導入したばかりでまだまだその機能は十分に活用できていない。また虫モニタリングについても、トラップを設置して観察をしてはいるが、それで終わってしまっている。また、

旧館からの資料が搬入された収蔵庫については、速やかに整理作業を進めるとともに、定期的な清掃を実施していかなければならない。

新館が開館して1年が経過したばかりであり、また全ての収蔵資料の新収蔵庫への移転が終了したばかりのため、まだまだ学芸員一人一人のIPMへの意識が高まっている現在、このモチ

ベーションを維持しつつ、引き続きIPMの研修会などへ積極的に参加して知見を広げ、他館の事例などを参考にしながら、たばこと塩の博物館ならではの本格的なIPM導入に向けて検討を重ねていくことにしたい。

(さかき・れいこ たばこと塩の博物館)